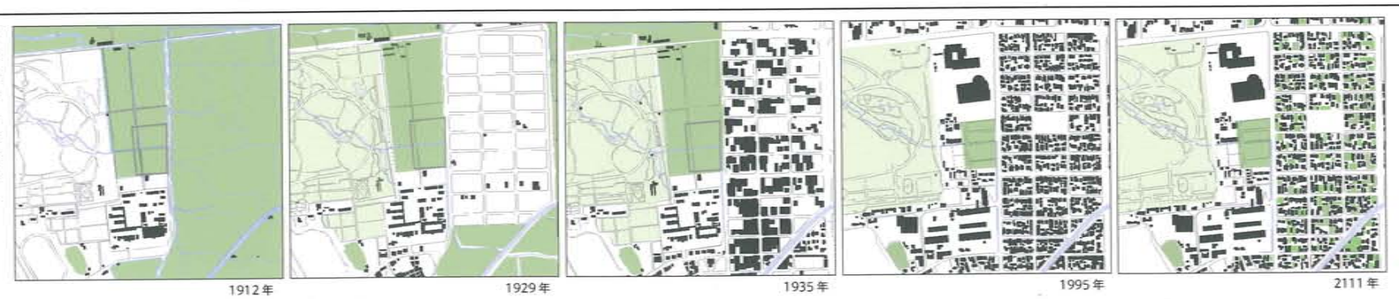
京都の庭／文化の礎／知識の床

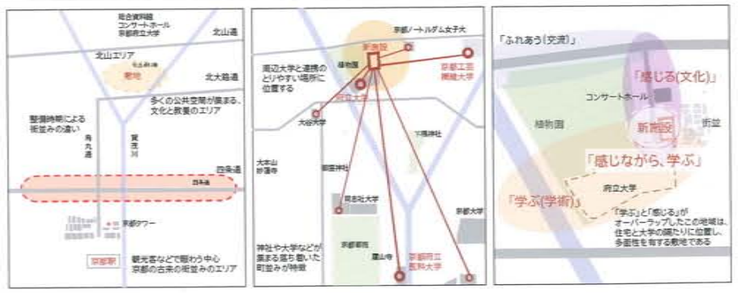
私たちはこの場所の１００年前を、資料館に所蔵されていた古地図で振り返ってみました１００年前からずっと緑地のまま変わらない貴重な場所であることがわかりました。私たちは、この貴重な場所が、１００年経っても変わらない環境でありつづける、京都の新しい庭をつくりたい。そして、１００年後、この建物に京都の歴史が集積されることで、文化の新しい礎になることを想像します。
大学生や府民だけでなく、この資料館に訪れる全ての人が、京都の情報を心地良く得られるような新しい知識の床をもった建築を提案します。

■未来の歴史としての庭

１００年前の敷地周辺は一面水田と桑畑が広がっていました。８０年前に、下鴨中通を挟んだエリアが住宅地として区画整理されます。そして４０年前には、現資料館も建設され周辺は住宅地に開発されます。しかし、この敷地だけは植物園と同様に、ずっと緑地であり続けました。そこで、私たちは今後も、１００年以上この場所を新しい緑の庭として未来へ継承することを提案します。



京都における新しい拠点／知識の床



a. 京都における位置づけ

北山地域は市街地とは異なり、公共施設と住宅地が隣接する閑静なエリアです。また賀茂川に挟まれ、植物園から星山・北雲山までが一望できる、経験される場所に位置します。大きな緑一庭のあるエリアとして、府民に憩いとやすらぎの場を提供したいと考えます。

b. 北山周辺地域における位置づけ

連携する３大学をはじめ、周辺大学と京都の高度な文化施設群との新たな連携を強化する場として重要なエリアです。エリアイメージの「感じる」「学ぶ」が誘なる敷地は、府立植物園との連携を図りつつ、清閑で親しみのある落ち着いた施設が望ましいと考えます。

c. 新施設のエリアイメージ

京都を「感じながら、学べる」場である新施設は、京文化・歴史の収集・保存・修復する拠点として、国内外に開かれた空間である必要があります。人々が心地良く、やすらぐ癒いの場所として、京都学の情報の川に合流かる京都る物の川流を思わせる緑が広がった庭をつくります。

基本理念

1. 都を感じながら、個々の探求を深めることができる、国内外に開かれた新しい「京都の庭」
2. 京都の歴史・文化資料の集積の場として、様々な人が集う京都らしい「文化の礎」
3. 京都研究の啓発・普及・支援活動の拠点として、また府民の交流拠点としての「知識の床」

■文化としての庭

近隣の住宅地に緑地が少ないのは、少子高齢化社会において、落ち葉掃除などの維持管理費の不安が要因です。皆が気持ち良いと求める植生の実現には、数十年から数百年かかるといわれています。京都の庭が、いつも美しい「ありよう」を示してきたように、この建物の緑もプライベートな「庭」として、手入れの行き届いた新しい文化になります。

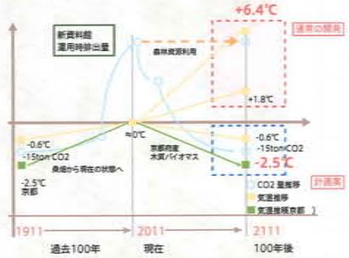
住宅地

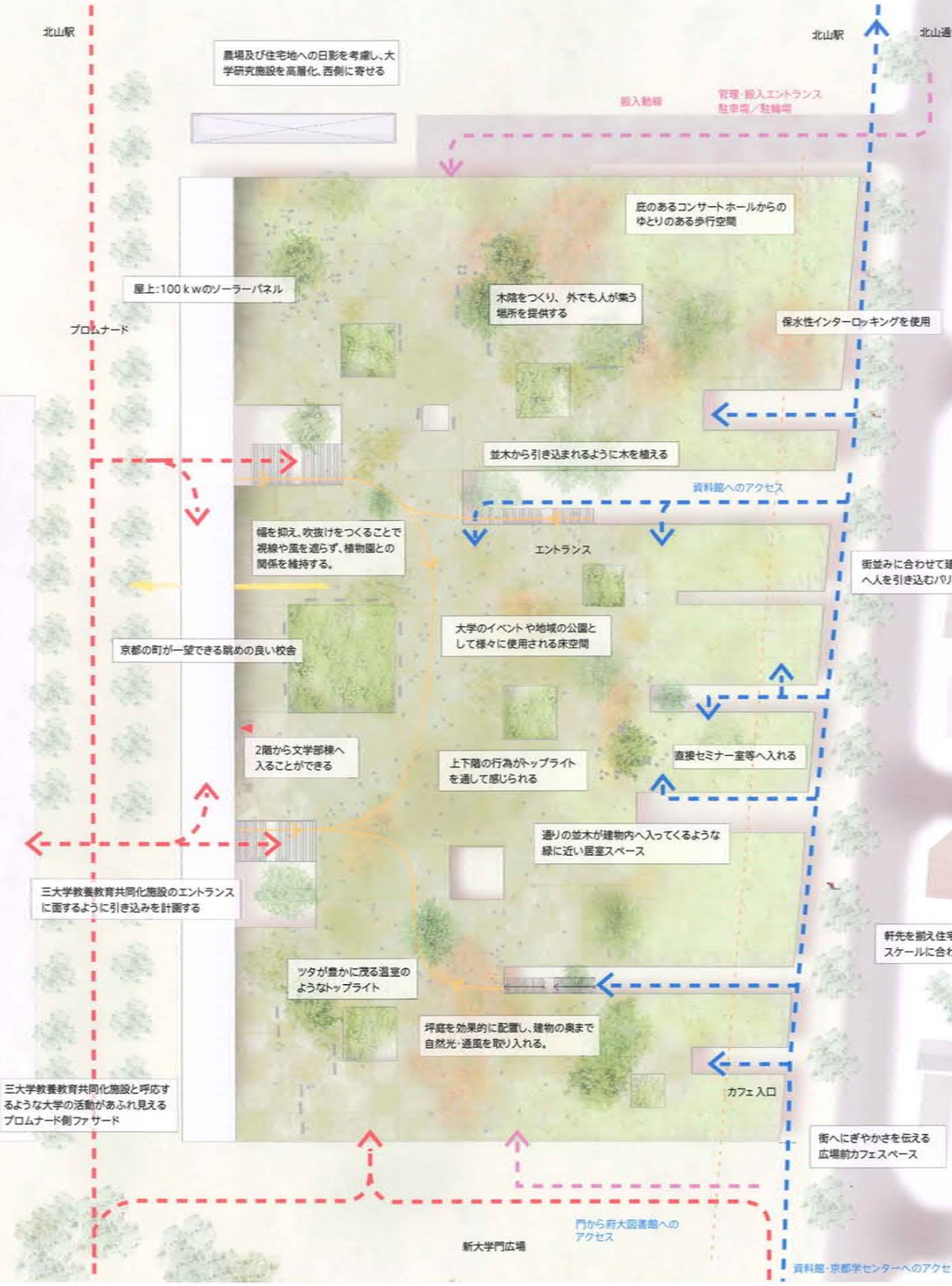
東福寺

円通寺

■環境先進地としての庭

１００年前の桑畑が広がる環境から、現在に至るまで、京都は２．５の温度上昇したと言われています。それを建設時から、１００年かけて、１００年前と同じ環境にしたいと考えます。また、屋上緑化、京都府産木質バイオマスといった森林資源利用、自然エネルギー利用、により温度上昇に影響のないレベルまで、CO2を削減します。このスキームの効果により、１００年後にはカーボンマイナスを実現します。敷地一帯を庭として新しく緑にすることによって「環境共都市・京都」にふさわしい、先駆的、先導的なシンボリックな場所になると考えます。

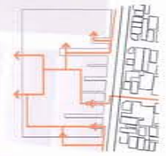




配置図　S= 1:500

■分節された見え隠れの場

走り庭、通り裏の路地のような分節された空間は、教養教育共同化施設、植物園の利用者、その他府民が集い、憩い、交流することを誘発するアプローチになります。また、大・小さまざまな庭を設けることによる、京町家としての明るく、落ち着いた学習環境を形成しています。

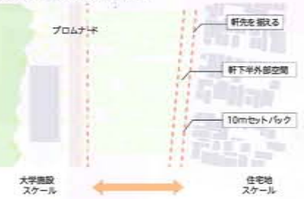


京町家の大きな路地空間

川床の起源となる
人々の集まる賑わいの場

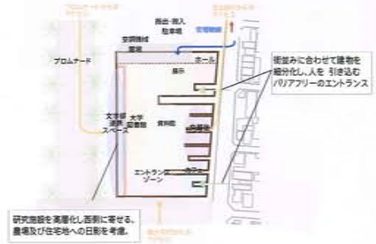
■街並みに馴染むファサード

東側住宅地の良好な住環境に配慮し、通りから10m程度セットバックして揃えた平屋の軒先空間は、街の小さいスケールに馴染みながら、ポケットパークのような府民が立ち寄りやすい環境をつくります。それは、イベント時・災害時にも利用可能なゆとりのある半外部空間にします。また、体の不自由な方等が、年齢を問わず快適に利用できるように、下鴨中通の緑を引き込みながら、住宅地からプロムナードまで段差のない床で施設の大部分を１階に集約しました。



■清楚な佇まいのＬ字建築

低層部分のスケールと対比するように、研究棟は薄い奥行きにすることで、キャンパスプロムナードの軸線を強調しつつ、農場及び住宅地への日影の影響、山並みの景観へ配慮しています。
長いボリュームの所々に門を開けることで、比叡山の山並みへの視線の抜けをつくり、プロムナードからの象徴的な玄関となります。Ｌ字型の断面をした建物の全ての部屋から、比叡山を借景にした大きな庭が眺められ、居心地の良い研究棟になります。



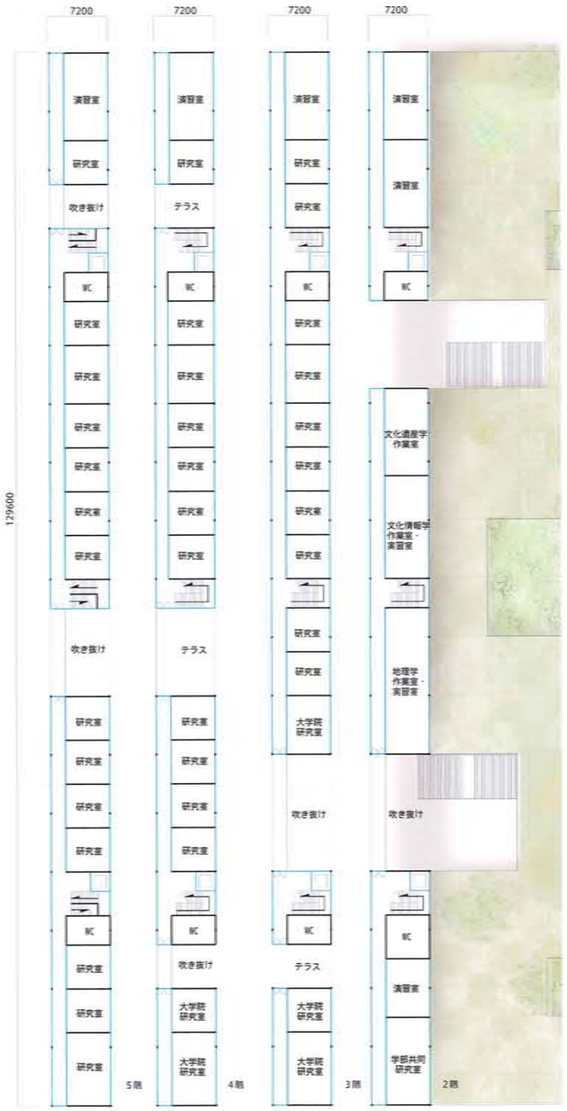
収蔵 所蔵されている豊富で貴重な資料類の資料を府民が気軽に活用できる為の、閲覧スペースの重ね使い

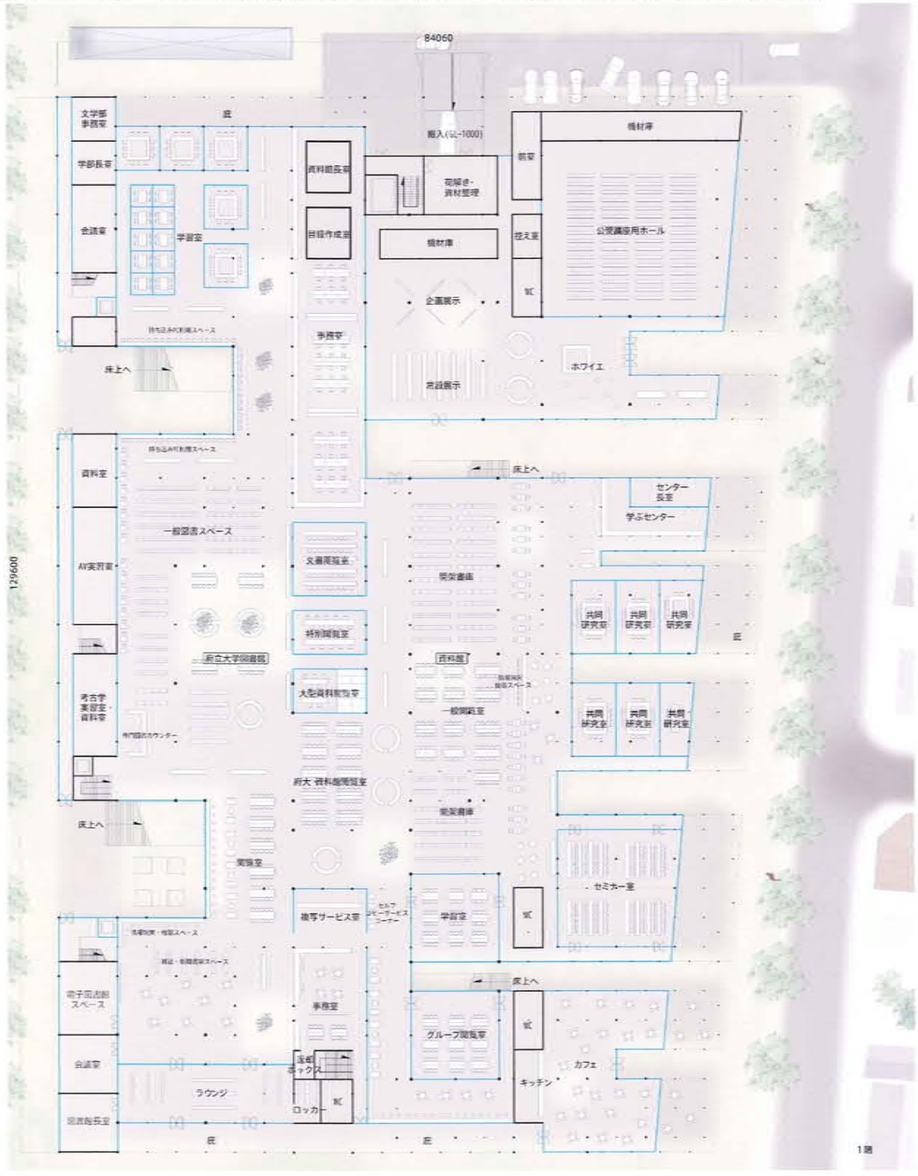
北山通りから南に抜ける将来整備予定の並木道のプロムナードを意識した東面の顔としたS外観

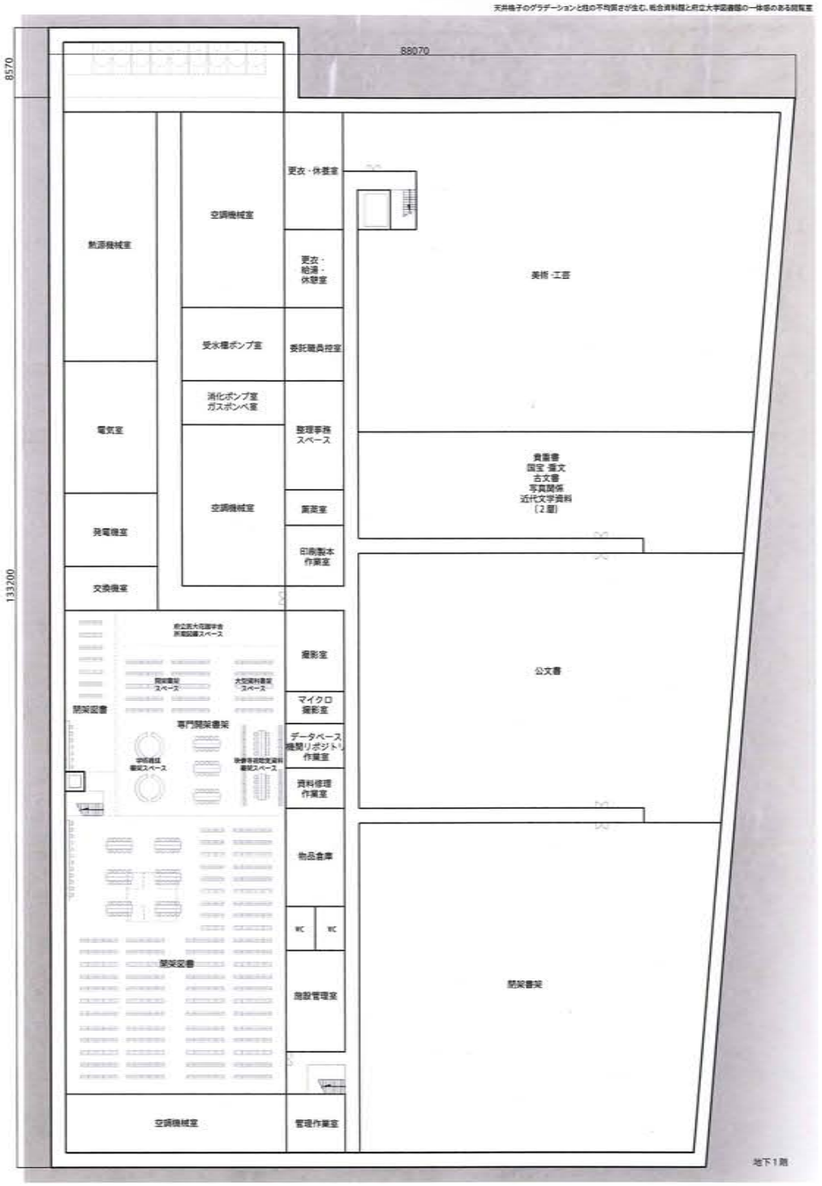
新たな利用者ニーズへの対応や情報機器の更新などにフレキシブルに対応できる空間をつくる床他

大学生から府民までが、気軽で快適な、落ち着いた時間を過ごす、カフェテリアなどのオープンスペース

天井格子のグラデーションと柱の不均質さが生む、総合資料館と府立大学図書館の一体感のある閲覧室







各階平面図 S=1:500

引き込まれた敷地に面した、明るく落ち着いた広さの、地域に開かれたセミナー室と共同研究室

府民、全国、国際的な交流と情報発信のための、展示スペースと公開講座用ホール

空間を緩やかに仕切りながら、場所を特徴づける高さのことなる落とし歩けと府内産木材を使った鋼板

床の上から眺め見る、人の流れと、自然エネルギーの流れと、京都の風の流れ

・川のようなゾーニングと曼のようなプランニング

下鴨中通からキャンパスプロムナードに沿って、国際京都学センター、総合資料館、府立大学付属図書館、府立大学文学部と、南北へ流れる川のようなゾーニングをしています。また、細かいプランニングの部分では、衝立、家具等で柔軟に空間を仕切ることで、曼のような多種多様な使い方、重ね使いの可能なプランニングです。

- 文学部
- 資料館
- 府大図書館
- 国際京都学センター
- 府大図書館・資料館共用部

ゾーニング図

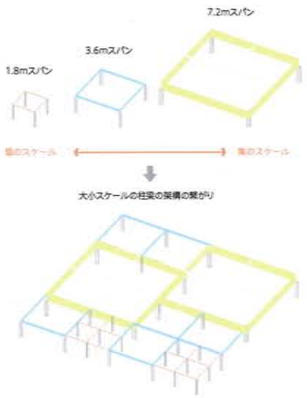
■個と集を繋ぐ構造としての 床　～濃淡のあるスケールをもった柱と梁～

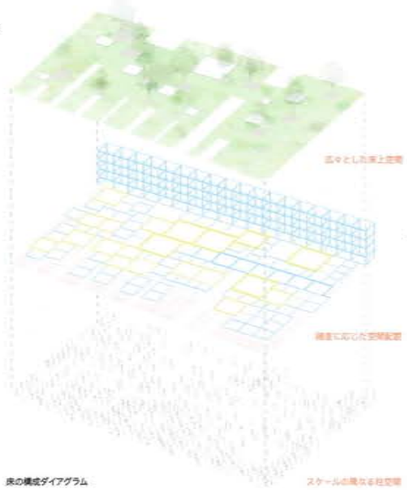
新総合資料館は、個のスケールから集のスケールまでが連続している建物です。
格子天井や様々な高さの欄間が、部屋の性格を特徴づけるように、小さなスケールから大きなスケールまでの柱と梁の架構の連続が、室内の平面計画と、屋上の庭の性格づけをしています。

・構造計画
高さ18mの5層構造による研究棟と高さ3.5mの平屋構造の低層部は、連続した鉄骨造として上部構造を形成します。地下・基礎構造は、鉄筋コンクリート構造とします。高層部は2方向ラーメン構造とすることで、開放的かつ将来の室配置変更に柔軟に対応が可能です。低層部は、スパンが小さな住宅地側(3.6m～)からスパンが大きな研究棟側(～14.4m)に向かって、柱断面と大梁断面を　段階的に変化させ、長期荷重時、地震荷重時ともに適材適所の部材配置にすることで、重心と剛心がほぼ一致し、平面的にも立体的にもバランスが良い構造としています。

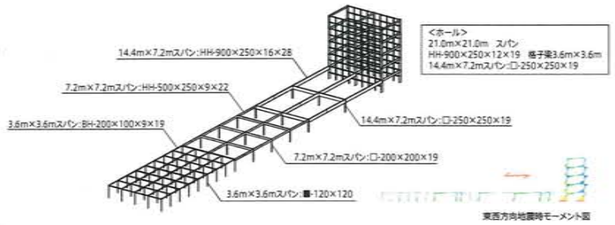
修学院離宮（京都）

納涼床（京都）





床の構成ダイアグラム



東西方向地震時モーメント図

南北方向地震時変形図

南北方向地震時モーメント図

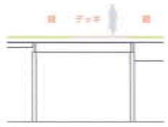
■京都の「文化」と「人」を、現代の「床」で京都らしく繋ぐ

昔、京都の人は居心地の良さを獲得する為に、川の流れによる涼を、簾間を空けて並べた板を、
川の上に敷き詰めるという、とてもシンプルな自然との付き合い方をしました。そんな川床のように、京都の文化と人とを繋ぐ居心地の良い現代の「床」では、
緑や光、風や雨といった「環境」のやりとりを実現します。

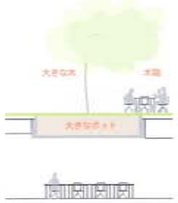
柱梁と柱の間に置かれる家具やベンチ・本棚

トップライトによる明るいスペース

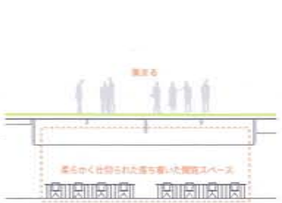
ツタによる木漏れ日スペース



デッキ等による床仕上の可変性



植栽による木陰の床庭



大きな柱梁と広く落ち着いたスペース

小さなポットと小ぶりな木々

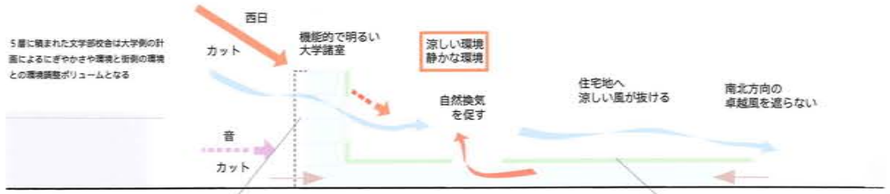
坪庭から廻間見る上下の様子

A-A' 断面図　S=1:500

B-B' 断面図　S=1:500

■環境調整装置としての床　～川床や京町家に学んだ自然空調と自然採光～

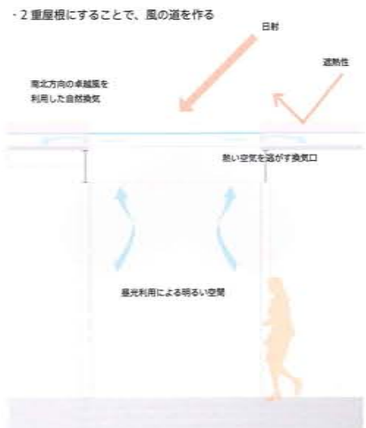
川床や京町家に学んだ五感による自然空調を目指します。緑や比叡山を眺め、風を感じることで、自然を眼と身体で感じ、機械に頼らない省エネルギーで気持ちのよい環境を作ります。「京の知恵」と「京の森」を最大限に利用することでエネルギー消費量およびCO2 排出量の 50%削減を目指します。建物配置計画も年間を通した卓越風である北風、夏の昼間に多い南風に対しても影響の少ない配置としています。また、間伐材を利用した木質ペレットを空調熱源として採用するなど、森林資源の有効活用を目指します。京都らしい知恵と工夫、府産木材の利用により、CASBEE 京都による S ランクを実現します。



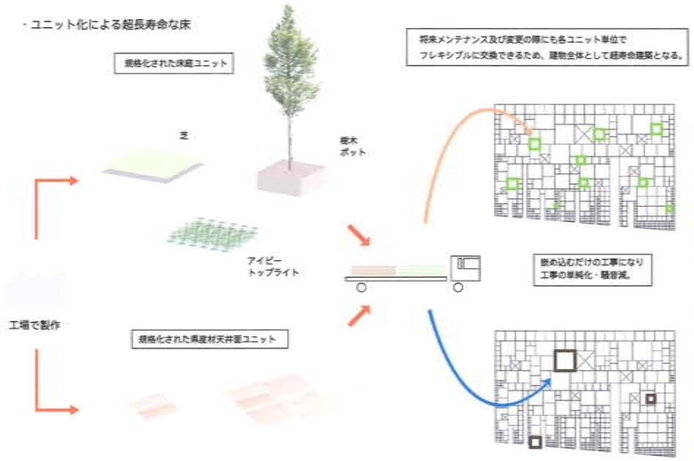
【西側のバッファーゾーン】
研究棟では、廊下を利用したバッファーゾーンおよび半外部空間の通風により、西側の日射負荷を抑制します。2 段階の low-e ガラス（外壁と内壁）により日射が直接、居室に届くことを抑え、日射熱は、半外部空間を利用した自然換気により、屋外に自然排気し、日射による熱的影響を受けにくい、居室計画とします。

【緑の床】
京都で最大規模の屋上緑化は、1 階の資料館への天井からの熱負荷を大幅に削減し、ヒートアイランドを抑制します。また屋上緑化が校舎の壁面に連続するように、壁面緑化によるガラス壁面の日射遮蔽効果を図ります。低層部分の呼庭、薄い校舎棟に設ける吹き抜け空間により、緑化部分で冷やされた空気が通り抜ける、自然通風の良い建物を目指します。

・2 重屋根にすることで、風の道を作る

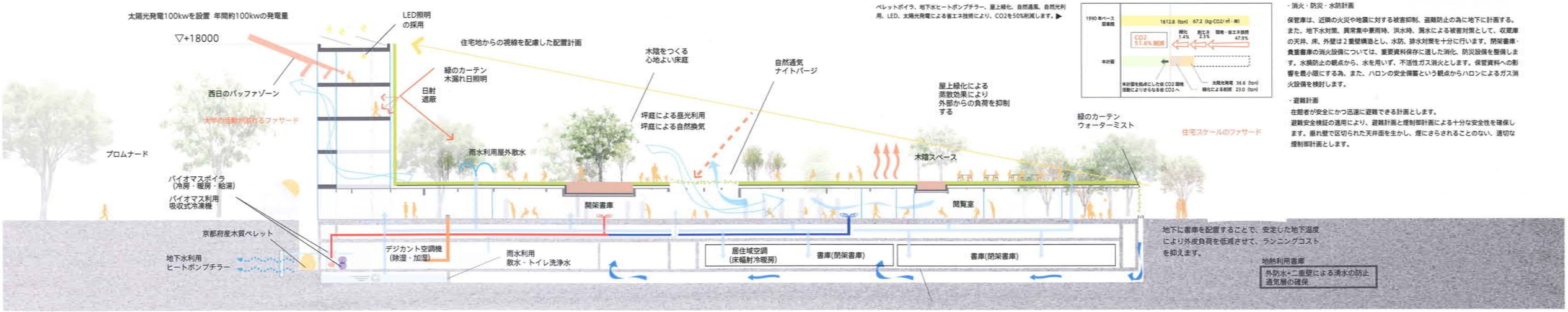


・ユニット化による超長寿命な床



・街と繋がるあかり

街との連続感を大事にするあかりを提案します。「防犯性」「省エネルギー」を考慮し温かみのある色温度のＬＥＤ照明を採用します。京都のまちの構成、そして建物構成の特徴でもあるグリッドパターンを強調しながらも町の人のアクティビティーを可視化するあかりにすることで、街全体がこの大きな庭を意識するきっかけになればと考えている。「庭」と「まち」を繋げるあかりを灯す資料館にしたいと考えます。



ペレットボイラ、地下水ヒートポンプチラー、屋上緑化、自然通風、自然光利用、LED、太陽光発電による省エネ技術により、CO2を50%削減します。▶

・消火・防災・水防計画

保管庫は、近隣の火災や地震に対する被害抑制、避難防止の為に地下に計画する。また、地下水対策、異常集中豪雨時、洪水時、漏水による被害対策として、収蔵庫の天井、床、外壁は 2 重壁構造とし、水防、排水対策を十分に行います。閉架書庫・貴重書庫の消火設備については、重要資料保存に適した消化、防災設備を整備します。水損防止の観点から、水を用いず、不活性ガス消火とします。保管資料への影響を最小限にする為、また、ハロンの安全備蓄という観点からハロンによるガス消火設備を検討します。

・避難計画

在館者が安全にかつ迅速に避難できる計画とします。
避難安全検証の適用により、避難計画と煙制御計画による十分な安全性を確保します。垂れ壁で区切られた天井面を生かし、煙にさらされることのない、適切な煙制御計画とします。

研究棟からの眺望。一面に広がる緑の床が知的な心地良さを醸出し、情景による比叡山の取り込む「見せかた」

平屋の建物の開放感と柔軟性のある空間と、柱と梁の構成による新しい「京都らしさ」

屋内外の一体感。屋外空間